

---



---

 学 会 記 事
 

---



---

## 第 8 回新潟周産母子研究会学術講演会

日 時 平成11年 3月27日 (土)  
午後 2時より  
会 場 新潟大学医学部  
有任記念館 2F

## I. 一 般 演 題

## 1) 中枢神経系疾患の出生前診断についての MRI と超音波画像との比較

渋谷 伸一・関塚 直人 (新潟大学)  
高桑 好一・田中 憲一 (産婦人科)  
森 宏 (新潟大学脳研究所)  
脳神経外科

目的：近年 MRI の進歩により、撮影時間の短縮および解像度向上の結果、周産期領域においても、その使用頻度が増加している。今回、胎児中枢神経系異常症例につき、MRI の有用性を超音波断層法と比較検討したのでここに報告する。対象：過去 4 年間に、当科において胎児中枢神経系異常と超音波診断された 18 例。方法：上記症例に対し同意を得た後、胎児 MRI 検査を行い、超音波断層法の結果と比較検討した。結果：超音波診断と MRI 診断、最終診断の一致例は水頭症、二分脊椎など 13 症例であった。MRI 診断で診断の変更および追加情報が得られたのは、水頭症→水無脳症 1 例、脳梁欠損 1 例の計 2 例であった。結論：胎児中枢神経系疾患の評価において、MRI 法は、その画質の向上および撮像法の改善により、超音波以上に詳細な情報を得ることが可能となり、詳細な病態の把握および分娩様式、出生後の治療法の検討に有用な検査法になりうるものと思われる。

## 2) 臍帯巻絡の超音波診断とその意義

長谷川 功・吉谷 徳夫 (済生会新潟第二病院)  
湯沢 秀夫・新井 繁 (産婦人科)

[目的] 分娩時の胎児仮死の大部分は臍帯因子による

とされ、臍帯巻絡をはじめとする臍帯の状況把握は分娩管理上重要である。今回臍帯巻絡の診断の意義について検討した。[方法] 当科における 1998 年の全分娩 950 例より、予定帝王切開、分娩機転の関与しない帝王切開、早産、骨盤位、双胎を除いた 834 例を対象とした。このうち 248 例 (29.7%) で臍帯巻絡がみられた。834 例における帝王切開率は 10.9% で適応は胎児仮死または分娩進行停止であった。また 74 例について臍帯巻絡の分娩前診断を試みた。[成績] ①臍帯巻絡のある例はない例に比して有意に帝王切開の頻度が高かった (14.1% vs 9.6%)。②自然分娩例の実測臍帯長  $57.8 \pm 11.2$  cm に比して、帝王切開例では  $54.1 \pm 12.6$  cm と有意 ( $p=0.004$ ) に短かった。③さらに (実測臍帯長 - 臍帯巻絡数  $\times 30$ ) を有効臍帯長と定義すると、自然分娩例で  $47.9 \pm 15.6$  cm、帝王切開例で  $40.2 \pm 19.1$  cm と有意性はさらに高まった ( $p=0.0002$ )。④この結果を初産婦、経産婦別に分けて検討すると、有意差は初産婦に限定されて観察された。⑤臍帯巻絡の超音波診断は、陽性的中率 85.7%、陰性的中率 95.6% であった。[結論] 臍帯巻絡は臍帯有効長の短縮を招き、特に初産婦において、胎児仮死・分娩進行停止による帝王切開率を上昇させる。臍帯巻絡は比較的正確に診断可能であり、分娩前に診断しておくことが望ましい。

## 3) 過去 5 年間の多胎妊娠・分娩例の検討

須藤 寛人・西川 伸道  
永田 裕子・安田 雅子 (長岡赤十字病院)  
安達 茂実・児玉 省二 (産婦人科)  
井埜 晴義・朴 直樹  
樋浦 誠・長谷川 聡  
松永 雅道・矢崎 諭  
沼田 修・鳥越 克己 (同 小児科)  
岡村真由美 (新潟大学)  
産婦人科

当科における多胎妊娠症例について、妊娠経過、分娩様式、新生児予後などについて、後方視的検討を行ったので発表した。

1. 1994 年 1 月より 1998 年 12 月までの期間に、当院で 3906 例の分娩があったが、多胎妊娠は 83 例であり、このうち双胎は 76 例 (1.9%)、品胎は 7 例 (0.2%) であった。

2. 83 例中、36 例 (43.4%) が IVF-ET, AIH や排卵誘発を受けていた。

3. 頸管縫縮術は 34 例 (41.0%) に行われていた。

4. 多胎妊娠の合併症として、切迫早産は約 8 割にみ